

# 若越郷土研究

35の6

## グリフィスと越前紙漉村

山下 英 一



にならざるをえない。一般の人に混じり、民俗を採用し、いろんな場所の地方の特色(ローカル・カラー)をよく知らなければならぬ。外国生活の精神を理解するには相当期間、その影響と指導を受けねばならない、とハーンは続ける(『Travel an Educational Influence』一八七九年)。これは彼の来日十一年前、アメリカ、オハイオ州シンシナティ市の新聞社で働いていた時の記事である。

はしがき  
私のグリフィス研究で、このごろ興味あることのひとつに、グリフィスの読書と散歩というテーマがある。読書については「グリフィスの読書習慣が日本での仕事に与えた影響」(『ザ・ヤトイーお雇い外国人の総合的研究』一九八七年。思文閣出版)に所収されている私の論文がある。また散歩については、一九九〇年三月、福井県生涯学習センター主催の県民大学で「グリフィスの歩いた明治の福井」と題して発表した。

山下 グリフィスと越前紙漉村

そして今、グリフィスのwalk(散歩)が好きなのは、ラトガース・カレッジの時代に愛読した作家の一人、Bayard Taylorの感化によると思う。しかしこれはグリフィスだけの問題ではなかった。ラフカディオ・ハーンの記事に「アメリカ文学の成功した例のすべては、その作家が旅行経験者であったという事実に大いにその真価があると言っても言い過ぎではないだろう。」とあって、モットレイ、プレスコット、ホーソーン、アーヴィング、ロングフェロー、らといっしょに、テラーの名をあげていた。というのは外国で芸術的なやり方で生活するには、少しはボヘミアン

武家社会の崩壊を目のあたりにする明治四年に、日本の奥地の藩に生活することになったグリフィスにとって、異教の土地でのwalkはテラーに倣った旅の延長にすぎなかった。それを証明するかのようにはグリフィスはテラー編『JAPAN IN OUR DAY』(一八八一年)の改訂をしている(一八九三年)。そのなかにグリフィスは『A Jaunt in Echizen』(越前小旅行)の一篇を入れたが、小旅行とは紙漉村栗田部見聞記だった。ちなみに初版と改訂版と較べると八個の章が除かれて新しく七個の章が加えてあった。

かねがね私は、この「越前小旅行」を紹介したいと思っていた。というのもお雇い理

学教師としての福井滞在中の日記で、土、日曜と夏休みを利用しての宿泊旅行(粟田部、山中温泉、三国の港、白山登山)の一つが紙漉村への遠乗りの旅であった。その外にグリフィスの書いたものには粟田部がよく登場する。メモ用ノート、手紙がそうであり、著書

としては『Corea—The Hermit Nation』(一八八二年)や『Honda The Samurai—A Story of Modern Japan』(一八九〇年)も紙漉の粟田部に言及している。前者は「朝鮮」<sup>(註1)</sup>、後者は「本田次郎」<sup>(註2)</sup>といった日本語の題も表紙に併記しており、「朝鮮」はその人民の歴史書であり、「本田次郎」はグリフィスの唯一の小説で、ペリー来航の幕末から西洋科学による近代化の夜明けに生きる一青年の思想の進歩をテーマにしている。

従ってこれらの記述の紹介も取り入れて、日清戦争前年の明治二十六年発行のベアード・テラーのポピュラーな旅行双書の一冊からグリフィスの「越前小旅行」の日本語訳を試みたい。

### 一 越前小旅行

日本に来た多くの旅行者がその体験を書いて

いるが、日本の本土を気候の異なる大きな斜面に二分する大山脈を越えて行った者は、比較的に少ない。日本の西南には米国の東部、中部、西部の諸州にあたる地方群があつて、山陰地方と山陽地方という名で区別されている。実際、日本の九の区分はどれも海か山の地帯である。

越前の国は北陸道にある。敦賀という大きな湾と港を有して、そこは本土の西海岸でこの二つの特色をもつ数少ない良港の一つである。昔は多くの朝鮮人や他のアジア大陸の移民が上陸した場所であつた。英国東部の古いサクソン海岸にいくらか似ている。今は、京都から来る汽車の終着駅になつた。敦賀から約二〇マイル行くと、Happy WellまたはWell of Blessingという意味の福井の町に着く。ここには数世紀にわたり越前の大名が家来をしたがえ、城を構えていた。自由な考え方で、西洋文明にならって日本の改革に

最初の指導的役割を演じた一人が越前領主、松平春嶽であつた。一八六二年、大君の政事総裁職となつて、大名が江戸に住むのを強制された慣習を廃止した。一八六八年の内乱(戊辰戦争)が終わるといふ早く、彼は福井へ「The Mikado's Empire」の著者を招聘して、米国式の公立学校を

設立しようとした。この歴史的形式の著書と小説的形式の『Honda the Samurai』のなかで、著者は封建制度のもとでの大名の首都の生活を写真した。また一八七一年十月一日の越前領主の退位を記述した。その時以後、封建諸侯に直接仕えていた藩士はすべて無条件に天皇の臣下になつた。彼等の忠誠が愛国心になり、彼等の国はもつ

越前だけでなく、日本であつた。

福井にいる時、この米国人教師は金札の紙が作られた工場の見学に招かれた。日本人は長い間、紙幣の技術に通じてきて、一八七二年まで大名は個別に支払いのための紙手形を発行した。形も大きさも価格も装飾の様式もまちまちのこの堅い札は、一歩その藩を出ると、普通役に立たなかつた。このために旅人は腹が立つほどしばしば両替をしなければならなかつた。この紙幣はその後、長くかかって天皇の政府によって回収され、焼かれたが、その代わりに、政府は円く、ぎざぎざの付いた、美しい極印の硬貨を大阪の造幣局で発行している。金、銀、銅、ニッケル硬貨の外に、国立銀行は紙幣という国民にはほとんど手間をかけるない流通手形を供給している。これは米国方式で政府が発行し、この国の神話上のシンボルや歴史

からとった絵を飾った小さめの紙幣で造られている。一八六七年の通貨であった二十三種の紙幣と四十九の形の硬貨に代わって、今は、貨幣基準が均一になった。

その紙製造業者は福井から約十マイルの場所にある栗田部 (Green Nook) に住んでいた。彼の「あばら家」に訪ねてくるように招待があった。自分の家を強いてこう呼ぶのは日本人の流儀にならなっている。

一八七一年六月のめずらしく天気の良い日。稲の苗が伸び、蚕が白布の復活の衣を着けている。米国人、通訳、護衛のサムライらの馬に乗った一行が、福井の門 (city gate) をさつそうと出て、「青い目 (碧眼) の外国人」によってそれまで乱されたことのない村に向かった。栗田部の町がある平野は長さ約二〇マイル、幅二マイルから八マイルあり、四方は山に囲まれている。わくわくするような歴史もあり、茶、絹、紙の豊富なことでも有名である。山腹には香りのよい、濃いほうろけの葉の常緑樹があり、花の季節は青白い茶の花で霞む。竹藪と松林にかくれるようにして、素朴な百姓、忙しい紙漉人や養蚕家の村がいくつも奇

りそっている。この地方の米はかなりなもので、越前和紙は日本国中、番頭から書記まで、いろはの手習いから立派な文人まですべての筆を使う人に欲しがられている。

栗田部という村の名の由来について、地元のが、十六世紀のはじめにここに住んでいたからだという。継体天皇 (二十六代の天皇で西暦五〇七年から五三一年まで統治した) は「偉大を投げ与えられる」(シェイクスピア) 前にこの小さな村をその住居にした。八世紀にさかのぼると、朝鮮の使節がここに連れてこられた。この村で作られる美しい紙に感心した。

平野を馬で行くうちは変ったことは無かつたが、公道を横切る小川に來ると、そのそばに処刑場があった。血の穴に日光がざらつき、血のりが赤くついていた。そして道路に近い一本の柱に、針金をかけ、うつむかないように頭に三本の釘が打ちこまれて、偽金づくりの頭部が釘づけされてあった。厚い紙幣を裂いて、そのちょうど半分ずつに偽の裏を糊で張りつけ、その能書家は上手にやっただけで見破られた。しかし、数週間は詐欺と上達

した技量で五〇パーセントの利益金を作るのとができた。柱にとりつけてある告示には、簡潔にその厳然たる事実が説明してあった。私の通訳がそれを英語に訳してくれた。そしてまた馬で進んでいった<sup>(註3)</sup>

午後四時に目的地に着く。私達の來ることは、午前中に先にやっただけの料理人から知らされていた。そこで村中の人がその始めての外国人客を見ようと待ちかまえていた。例によって村役人が門の向こうに出てきて私達を歓迎した。両手両ひざをつけて、地面に平身して、歓迎のあいさつをした。村の通りを進んで行くとき、人々は蚕のえさやり、絹の巻取り、綿ほぐし、紙漉きの手をやめて、立ったり、ひざまづいたりして、訪問者をじっとよく見ていた。米国人で自分の前に数百人がひざまづく光景を楽しむことはまずない。私はその女子供がまるで祈りをするかのように両手の指を組み合わせてひざまづく村に行ってきた。藩主の役人や家来に對する尊敬はそれほど大きかった。

村の通りは数百枚の板が立ち並んでいた。板には漉いたばかりのたくさんの紙が干して

あつた。また板の上に敷物を置いて、たくさんの藁が積んであり、生糸を巻き取る用意をしていた。私達を迎えてくれる商人の家の前までくると、人だかりが分かれ、そこで私達は馬をおりた。二、三のめずらしがり屋だけが、外国人の目と髪の色を見たり、そのわけのわからない話を少しでもわかろうとして寄つてきた。

私は主人に手をさしのべた。彼はその手を見たが、これが向こうの策略か知りたいたいと、通訳の方をふりむいて嘆願するような目で質問をした。握手を知らない主人は親切にも客が現金か、つま楊枝か、ハンカチを借りたいのだと思つたけれども、ついにその手を私の手に置くことだと理解した。従つて彼のしなやかな左手は外国人の右手に従順におさまつた。思わず知らず彼の手の指が振られたが、傷を受けないで静かにもとにかえた。これはまたとない冗談だと思つた彼はやにわに大笑いをして、この緊張の氷は解け、友好の洪水となつたのである。

五分で馬は馬屋に入れられた。そして豆の食事に先立つて、わら束でからだをこすつて

もらった。一方、乗り手の方は家の奥の庭が見え、広い風通しのよい部屋に通された。そこには、矮性のもみじと松、あじさい、つつじ、大きな白ゆり。そして、模造の山と小さなどろきを起して落ちる滝が、銀色の小石の上を跳び越えて、錦鯉が光る、亀の遊ぶ池に流れていた。小さなほら穴と模型の絶壁のある岩石庭園が庭の景色に人工の野性味をそえていた。目を上げれば、はるか高く、「日野」の草むした山ふところがそびえていた。わが村はそこに横たわつていた。

家に入る前にお辞儀と祝辞が西洋の考えからすれば十分過ぎるほどであった。しかし、これくらいはまだ盛大な儀式の前哨線だった。休憩間に入つてほつとするまもなく、馬鹿ていねいな場面が続いて起こつた。この主人とサムライのミヨシが互いに向きあつたかと思つと、合図があつたように急にそこにひれ伏した。しばらくは畳にすれすれのつるつる頭しか見えない。ドスンノ二つの頭が床についた。ひよいとあがり再び床につく。もう一度あがつて、つく。あげ、さげ、ドスンが両方四回つづくが、そのつど激しく息を吸い込

んだ。私の主人が終わるとミヨシは通訳の岩淵の方へ向く。すると通訳はシーザーのように衣服を広げて、この試練を堂々と切り抜ける。道理で日本人の額には毛がないわけだ。その日の最も重大な仕事ですむと、彼等は正座して、幅広いズボン（はかま）を広げ、扇を出して、せつせと使う。

儀式がすむと、きせるを出して、たばこをつめる。十三歳ぐらいのかわいい娘が、たばこ盆（金箔の漆塗りの火箱）をもって爪先で小股に歩いて入ってくる。この娘は夏の生地 of 可愛い着物（日本のドリーバードン・パタン「絹、ロンなどの上に印刷された花束模様」の）をきて、腰に赤い絹の帯をしめ、青い縮みの輪（Bad）の髪飾りをつけていた。ひざまづいて、てのひらをつけてお辞儀をする。それからすばやく立ち上り、小さな茶碗と真白い紙にのせた菓子の入つた小さな台をもつてまた現れる。

主人は太つた、陽気で話好きな人である。彼の先祖はこの村に住み、六百年この仕事についてきた。現在の家の一部は三百年たつている。家に影をおとす巨木は、彼の祖先がやつ

てきた時十分に成長していた。家の一方の端にその家族の仏間があり、その中に家族の仏壇があり、先祖の遺骨が祭つてある。それを見たいと思うかと訊かれれば、願つてもない。

庭から家の向う側へ出ると、外国人が見に来るといふので大きな作業場に十人ほど少年少女がカジノキ（東アジア産のクワ科コウゾ属の木）の枝の山を前に正座していた。この枝から大量の和紙が作られるが、村の山の斜面はこの木でおおわれている。カジノキは六

たい石の前に坐つていた。そして重い木製の棒でその樹皮をたたいて、パルプのようにする。隣の部屋では一人の男が炊いた米をつぶしていた。一人の娘がそれを他の木で何かニレの一種に似た樹木（北米東部産。樹皮に芳香と粘性がある「訳者註」）の樹皮からせんじた汁にまぜていた。やがて光沢のあるにかわ状の混合物で、明らかに糊のつもりのものできあがつた。この糊と樹皮たたきから出

先祖の名前が書いてある。幾星霜のあいだに汚れて名前が薄くなつたり、金の落ちたものもある。主祭壇の下にハスの花にのつたもう一体の涅槃の仏像があり、その前で「鐘、お経、ろうそく」が毎日のお参りに使われる。灰を入れた磁器の鉢に、「線香」(joss sticks)と異教徒から呼ばれる真赤な香木の束が立っていて、み仏の前に小さな香の煙を漂わす。右手の戸棚から主人は署名帳を次々と取り出す。それには天皇、武將、將軍、京都の公家の筆跡や日本の賢者 (sage) の歌のついていた。刀劍、香箱、帯、すずり箱、など天皇や將軍から贈られたものが豊富に展示してあつた。石油貴族 (petroleum nobility) が見せるもの

切つてから乾かし、それから水に浸してやわらかくなると、外側の緑の樹皮が内側の白い膜からはがれる。このあとの方の仕事はひと続きの納屋の下で、ゆるい流れの川にかがんと、数十人の婦女子がしていた。彼等はほぐしと洗いをくり返して、黒くてもろい外側の樹皮と内側の白くてしなやかな細長い膜に分けた。これを完全に行うには多くの時間と忍耐がいる。次にそのしなやかな白い膜の束を、わら灰で作る灰汁 (あく) のなかでやわらかくなるまで煮る。次の部屋では煮てやわらかくなった樹皮が二人の屈強な男のもとに持ち込まれる。彼等はふんどし一つで、大きな平

この大桶の一つずつに一人の娘が日本で最も普通のかかたと足首の席に坐つて、元氣よくパルプを一本の棒を使つてかきまぜていた。彼女はパルプが適当にかたまつたと判断すると、一枚の四角い竹簧をとり出す。これは細く切つた竹を平行に並べて四角い軽い木わくに入れ、印刷機についているような「紙取り (あおり出し装置)」を取り付けたものである。細かく詰めた竹簧は米国の針金の網の目的になつていた。これを滑らすように大桶に漬けて一枚のパルプを引き上げる。水がは

けるのを待つて、その間、その機敏な指で不純物やかたまりをつまみ出すと、持ち上がった竹簧の縁に付いている紙取りをもどし、自分のそばに積んである紙の上にその一枚を広げるのである。手先の器用な娘は一日に約四五〇枚をすくいあげることができ、次の段階はその紙を干すことである。この目的のために太陽に傾斜して立てかけた板にその紙を平らにしつかり広げる。雨の日や仕事が終わってきたてられている時は、この干し板は熱い炭火を燃やしてある部屋に移す。紙のプレスは普通の楔か、梘子とする。仕上げの光沢はちよ

うど米国で皮革を磨いて、アイロンをかけるのと非常によく似た方法でつける。すべてこういうことは米国の製造業者には耐えられないほど退屈だろう。そして米国のような高賃金の国では割に合わないだろう。私がコホース (Cohoes) (米国ニューヨーク州西部のコホース市、紙の産地、紙業社) とバス (Bath) (米国ニューヨーク州西部のコホース市に隣り合う都市、紙業社) の製紙工場が使われる機械の説明をすると、主人は喜びと不安のたがいに入り雑じった気持ちで聴いていた。私は使用人に払う日当について質問した。樹皮を叩いて水に浸す人には一日八

天保銭(セント)、樹皮を剥いで洗う人には六セント払う。全部で四〇人雇っている彼の店では、賃金、燃料費、運送料、税金などを払って、毎年、千ドルという相当な金額を貯えることができた。彼は金持ちの商人と思われていた。

主人の店はいろんな色、質、大きさ、厚さの紙を造る設備がしてあった。手紙用の紙が特製品のひとつであった。日本ではこの紙は普通、幅六インチ、一枚の長さ約一八インチで、必要に応じて、糊で縦につなげて、巻き物にする。

日本語の長い手紙は六フィート以上の代物である。婦人用の便箋は香が入っていて、金縁で、赤い罫がついている。贈り物を包む時に使う紙は富士山、果物かご、貝がら、文学上の図案などの模様で、色を使って描写してある。ある紙は軽くて、漂白したくもの糸で織つてあるように見える。藁半紙の生産は日本の重要な産業である。それ以外にも数種類の樹皮が紙の原料に役立つ。一般に和紙は絶妙なやわらかさで、絹の光沢があり、日本と中国で人気のある書道 (the manner of writ-

ing) に適切である。ここでは筆がペンで、いわゆる India ink (墨) を絵の具として使用する。どんな種類の和紙も非常に強く、なかにはどんなことをしても裂けないような紙もある。やわらかさと強さが和紙特有の性質である。

私達は紙工場から部屋にもどつて、夕食時間まで、日本の財政や政治について自由自在に話し合った。夕食が終つて、寝についた。六フィートに四フィートの詰物をした掛けぶとんが運ばれてきて、それを二枚重ねにして寝床にした。寝台の骨組みも、シーツも、羽毛の枕も、リンネル一枚もこの純日本式ベッドにはついていなかった。しかし私達の寝着や掛けぶとんは極上の絹であった。もっぱら格子縞の絹が寝具類に使われるが、米国の日本人が婦人のマネキンにあの昔、流行した格子模様ドレスを見ると、変な連想を起こすだろう。次に蚊帳がつけられる。ほとんど部屋全体の大きさを、mosquito-house (蚊の家) と呼ぶ方が似合う。なぜこんな小さな害虫に mosquito という長い名前がついたか、それを私 (蚊) と呼ぶ日本人には理解できない。私

達は緑の網の中に横たわり、主人が「おやすみなさ」(may you have honorable rest)を述べて、出て行く。細い流れのぴちやぴちやという子守歌が眠りを招き、遠く離れた草原の小川と故郷の人の顔の夢を招く。

## 二 グリフィスとテラー

グリフィスがラトガース・カレッジ時代に愛読したテラーの作品の一つに『Views Afoot』(一八四六年)という、ヨーロッパ徒歩旅行記がある。これは米国の紀行文学のバリオニアの役割をした。

このなかで彼は旅行者の心構えをこう説く。へもし旅行者が慣れっこになっていた生活に少しでも磨きをかけるような気持ちをしきよく捨てるなら、彼は殆ど旅の準備はいらない。彼の前に開ける新しい興味ある観察の領域のために、堅いベッドで寝ることに満足し、粗末な食べ物にあずかり、時には警察官や、宮殿やギャラリーの門番の粗野に耐えたり、何時間も避難するところがない風雨のなかを旅しなければならぬ。始めはリュックサックが両肩に重く、手足は一日の歩きで疲れ、

時には心が全身の疲労で弱くなるだろう。けれどもまもなくこういうのは消えていく。この本は副題が示すようにリュックサックと杖のヨーロッパ見て歩きであり、この刺激もあってグリフィス自身、姉マーガレットと三カ月のヨーロッパ旅行をしている。旅のスクラップブックに行く先々で草花をページに挟んだ。

グリフィスをテラーに近ずけた要素がいくつかあった。その最大なものは先に述べた如く、遠い国への旅の誘いである。二人ともフィラデルフィア市を流れるデラウェア川を見て育つ。グリフィスの両親は衆派協会の信者、テラーの両親はクエーカー教徒という共に信仰の厚いキリスト教徒の家庭に育った。とくに彼等の母はともに息子の教育に熱心であった。

英語にself-madeという言葉があるが、テラーこそ文学で身を立って代表的人物であった。このテラーが日本と関係を持つようになったのは、すでに「言葉の風景画家」の異名を取っていた一八五二年頃、東洋の旅の途中、香港で日本遠征途上のペリーを知り、

彼の船に乗り込んで日本に来たからである。その時のことをテラーは『A Visit to India, China, and Japan』(一八五五年)の中で臨場感あふれる筆で描いていて、ペリーの日本遠征記を読む上で、グリフィスの「ペリー伝」(一八八七年)とともに大いに参考になる。

ついでに書くと、明治三十五年、大和屋という書肆から鈴木豹編で『Biographical Sketches of Self-Made Men—selections from lives of poor boys who became famous』というテキストが出版された。その立身出世の人物の一人にテラーがいた。一八七八年、彼は駐独大使となっている。その赴任直前にグリフィスはニューヨークで彼と会って日本のことを話していた。グリフィスの著した『The Mikado's Empire』(皇国)が大いに読書界の人気を集めていた頃である。しかしテラーは赴任の年の十二月ベルリンで急死した。今は亡き詩人は一八七九年三月十三日、数千の人に見守られて、ニューヨーク市役所に安置された。翌日、遺体はペンシルベニア州シダクロフトに運ばれた。そこで文人、友人に囲まれて彼は安らかな眠りについ

た。ホームズ、ロングフェロウ、ウィットティ  
アらの詩人が甲辞をたむけた。熱心な学徒、  
成功した外交官、真の友人、立派な詩人、有  
能な旅行者、生涯を靈感してやまなかった人  
とこの立身出世物語りは結んでいる。

五十三歳の生涯に三十数冊の書物を著した  
テラーはその時代の最も名譽と才能にめぐ  
まれた文人の一人であった。その創作はつね  
に技能と配慮をもつて構成されていた。確か  
にあまりにも多方面に手を広げすぎる傾向が  
あった。このことはグリフィスについてもい  
くらか云えることも知れない。彼をして多  
作な作家といわれる所以である。共に多くの  
旅をした。両者が日本の土地を踏むのは二十  
七歳の時であった。講演をした。テラーは  
ドイツ文学を通じてドイツに親愛感があった。  
彼の「ファウスト」(ゲーテ)の英訳は一八七  
一年に出ている。グリフィスは生涯、日本に  
ついて親近感を懐き続けた。雑誌への寄稿も  
共に多い。共に文化外交の使節としての面目  
があった。

しかし多感の青年グリフィスがテラーに  
最も強く共鳴したのは詩的感興であった。

かつて私はグリフィスの氣質としてロマンチ  
シズムをあげ、そのあらわれが日没への渴仰  
と旅への憧憬であり、その頃の日記には宗教  
的神秘に満ちた美しい日暮の描写と山野への  
徒歩旅行のロマンチックな記録を見ることが  
できると書いたことがある。

テラーにとって、詩はもう一つの宗教で  
あったといわれる。その詩は自然、愛、エキ  
ゾチックなものへの不思議な熱望が、涸れる  
ことのない泉のごとく湧き出たものである。  
試みに彼の詩集から任意に小さな詩を拾って  
読んでみよう。

The Poet said : I will here abide,  
In the Sun's unclouded door;  
Here are the wells of all delight  
On the lost Arcadian shore:  
Here is the light on sea and land,  
And the dream deceives no more.

from "The Poet in the East"

詩人は云った。私はここで住もう  
太陽の翳りなき戸口。  
ここにすべての歡喜の井戸がある  
失われたアルカディアの海辺。  
この海と陸には光輝がある  
夢はもう欺かない。

グリフィ  
スにとって、  
神話伝説と  
豊かな生産  
の美しい里、  
粟田部は、  
福井のいや  
日本の田園  
の理想郷、  
アルカディ  
アであった。



あとがき

今年の八月、私はグリフィスの学んだラト  
 ガース大学で、グリフィス・コレクションを  
 はじめとするグリフィスのドキュメントをで  
 きるだけ手にとりながら、ゆっくり研究生活  
 を過してきた。一九七六年以来、長短期あわ  
 せて五度目の訪問であった。もっぱら指の間  
 からこぼれてしまうようなメモの紙片にも神  
 経を働かせて、好奇の目を輝かす毎日だった  
 が、研究者にとって、研究の対象に直接触れ  
 たりその場に自分を置いてみて、始めてその  
 研究が自分にとって何かを問いかけることが  
 できることをあらためて認識した。

グリフィスはそれも困難な時代に、それ  
 も五年間の日本生活を足場に、長い生涯に片  
 時も日本について新旧の事情を確かなものに  
 して、それを文章にして伝えようと努力を惜  
 しまなかつた人であった。調査中に指先から  
 滑り落ちた紙片を拾って見ると、かならずと  
 いったいほどそこに日本に関するメモの文  
 字が書かれてあった。グリフィスの「日本」  
 は強いていえば必死のテーマであったのだ。  
 それを思うとグリフィスの良き理解者たらん

山下 グリフィスと越前紙漉村

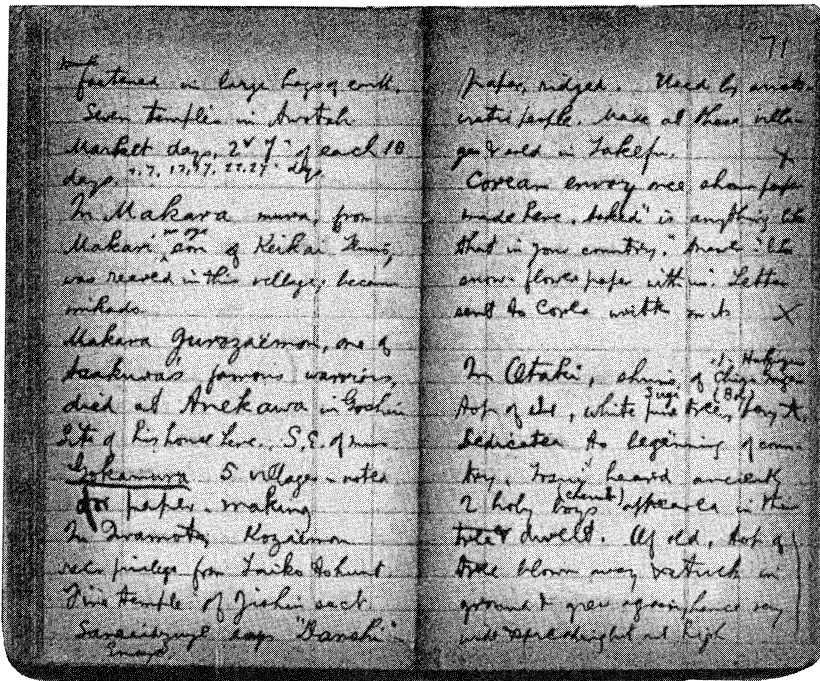
とすることこそが今、求められているのであ  
 ると思つた。

カレッジ・アベニュー・キャンパスの一隅  
 にJane Voorhes Zimmerli Museumの赤レ  
 ンガの低い建物があるが、休館中だった。し  
 かし告示板には九月十六日オープンEshizen  
 Washi-The Art of the Traditional  
 Japanese Handmade Paperの表示が出てい  
 た。グリフィスに越前和紙について書いたも  
 のがないか、展示したいと尋ねられて、私は  
 越前小旅行のエッセイのあることを教えた。  
 今のところグリフィスの書いた和紙について  
 の文章はこれだけだと思つた。  
 越前和紙そのものの見本にふさわしいので  
 はないかと思つたので展示をすすめたのが、  
 昭和二年四月に福井を訪れたグリフィス夫妻  
 の歓迎のパーティーで出された和食の献立を書  
 いた和紙で、これはグリフィス・ドキュメン  
 トのなかにあつた。(図1)

和 献 立

高飯 飯  
 吸物 鯛のつまじれ  
 本の芽 本の芽  
 小井 針生姜  
 本の芽わへ 本の芽わへ  
 烏賊 烏賊  
 胡瓜 胡瓜  
 金てん 金てん  
 刺物 刺物  
 焼物 焼物  
 栗物 栗物  
 口取 口取  
 栗のしりしり 栗のしりしり  
 独活のせん 独活のせん  
 わさび わさび  
 お茶 林檎  
 菓子 菓子

(図1)



〔図2 五箇村、大滝の地名が見える〕

また、一八七四年の頃のメモで、紙漉で有名な五箇村といった短い覚え書きでつまった小さな古いノートを手にしたが、これもまた越前小旅行に役立っていることを知った。(図2)註にこれまで活字で発表した私の訳文を入れたのはそれらの小さな記録がこのエッセイのような創作に大いに役立っていると思われるからである。記録と持続というグリフィスのストーリーテラー(物語り作家)としての特質の一面を彷彿させてくれるだろう。

なお粟田部をグリフィスは最後まで Aotabi (Green Nook) と表記していた。図2によると Awotabi は十二の通りと三四二軒の町で、ここに住んだ Oatobi 皇子の名に因んで Awotabi と呼ばれるようになったとある。緑のへんぴな土地という意味の Green Nook は英語の当て字である。

テラーゆずりの観察と好奇心、それに詩的表現もあるこの旅と文学のエッセーは郷土史の関心の上からも興味がつきないが、グリフィスのこういう記録を楽しむためにも私のこの文章が一助になれば幸いである。

## 註

## (1) 「朝鮮」序

山の間にはアオタビ (Green Nook) の小さな村が具合よく立っていた。その村は数世紀前に紙職人が定住した。千年前、隣の半島から貢物をもって使者が訪問した。両国間の外交文書を書いた和紙 (crinkled paper) の生産で有名であった。

## (2) 「本田次郎」

皇太子の一人が越前に住んでいた初期の世紀の頃の話を読んだ。彼が狩りの途中、馬に水をやるために止まった小さな村では、今でもその名譽を誇りにしている。なお他の村でもその村人はかつて王位を継ぐ皇太子の道化を演じてよろこばせた踊り手の子孫であると自慢している。敦賀から福井へ行く道の右手の山中に、今、紙づくりで有名な美しい村があり、そこに皇太子が住んでいた。皇太子は美しい娘に恋をした。娘も皇太子に恋い焦れた。二人は身分が違っていたが幸福であった。しかしある日、京都から急使と皇族が来て、皇太子が日本国の支配者として天子の後継者であると知ら

されたので、皇太子は王位を継ぐため大勢

になった。

の供を従え、失恋の娘をあとにして馬で立

(4-1a) 「グリフィス先生越前豆日記」

去っていった。心をなぐさめることができ

一八七一年 (明治四年) 六月二十四日

ない娘は気が狂ってしまい、皇太子がお気

(土) 馬で行く。栗田部に入ると大勢の群衆

に入りでいつもも持っていた花籠を取ってそ

が唐人を見を集まった。ほとんどの者がひざ

の跡を追ったが、さまよっている間に娘は

まずき、いつもとちがって顔をきれいにし

山で道に迷ってしまった。村人はこのかわ

いた。紙漉き村はこぢんまりして美しい。そ

いそうな娘のためにその家の近くに記念の

こに住む人もそうである。大きな古い家敷で

桜を植えた。長い間にそこは廃家になり、

休む。高い山、気持ちのよい涼しい庭。庭石、

その敷地には再び家のたつことはなかった

金屏風、古い見事な木細工。紙漉き場で三十

が、記念の桜の木だけが、たびたび移しか

人が働いていた。鎮護大権現の神社を訪ねた。

えられて、春になると雲のように花を咲か

うっそうとした森に豪華な彫刻の神社と昔の

すという。

天皇の像が隠してあった。天皇の筆跡の一部

## (3) 「グリフィス日記」

一八七一年十一月二十二日 (水曜日)

経った巨木。山に上がると村がよく見えた。

今日、鼻かぜをひいた。職人がまだ火格

を調べた。外国の紙のいくらでも長くなるの

子の仕事をしていた。ヨハンの母が家を見

を見本で話すところだ。岩淵と二人で寝

に訪ねてきた。夜、偽金造りについて話し

るまで日本のキリスト教を議論した。蚊帳を

た。というのは、昨日、府中に住む六十歳

吊ってふとんに気持ちよく寝た。夢に江戸の

の坊主が打ち首になり、今も大道に首が晒

豪華な大学が現れた。朝、大小の亀。インディ

してあるからだ。彼の罪は福井金札の偽造

ペンデント新聞を読む。絹の蚊帳生地、一人

であった。仲間がいて、その金を派手に使っ

たので、見つけられ、首謀の坊主が打ち首

一日に十六尺織る。奉書紙。寺しか時計のあ

る所はない。庄屋で一休み。その商人の家宝を見た。インク壺、四百年前の絵、三百年昔の家、千年の家系、家の前の千年を経た木、持仏堂、槍など富と時代を示すものばかり。三百年前、將軍より拝領の刀、返礼の屏風。宿屋。ルーシー氏の別れ。看板にどこかの宗教団体の一行が泊まるとでている。おどろくことにテーブルも椅子もソファもなしでその人達が実に楽しそう。

(4-b) 「グリフィスと福井」

六月二十四日 土曜日

放課後、五時まで読書。馬で栗田部へ行つた。役人が馬に降り落とされ、もう少しで自分の刀に突き刺されるところだった。気持ちのよい家、紙づくり、人が大勢やって来た。岩淵と話した。蚊帳を吊って安眠した。

六月二十五日 日曜日

日本のどこでも宿屋は、有名な、又は、偉い人が泊まる時、前もって知らせがある。入口の部屋にその通知のはり札のしてあるのが見える。このようにはり札が集まると、名前の陳列室ができる。又、或る団体の印

や記事がかけてある。そのような団体の仲間が宿屋の得意客である。宿屋の人にたのまれて金言を書いた。他の村を訪ねた。家宝、仏壇、位牌を見た、又、他の村を訪ねた。府中をまわって帰った。夜、家へ手紙を書いた。田舎を馬で行くと、稲田が緑の大草原のように見えた。人々が麦とえんどうを地面の上のむしろにひろげて日に乾かしている。その上を避けて馬で行くのは大へんむずかしい。

(4-c) 「グリフィス福井書簡」(姉宛の)

一八七一年六月二十五日 安息日の夕べ

学校は今、六月二十三日から九月二十三日まで六時から始まります。朝の涼しいうちに出かけるのはほんとうに気持ちがいいです。十二時に終わると、午後は読書と運動で過します。土曜日の午後一時、訪問者のない静かな安息日を過すのに、栗田部といつて福井から約十五マイルの所へ馬で出かけました。無事に進みましたが、役人らしく笠に新しい絹の衣服で豪華に飾りたてた私の役人が馬からふり落とされて、間一髪、さやから抜けた自分の刀に串刺しにな

るところでした。この役人は馬乗りが下手で、今日の帰りにまた投げられて田んぼに落ちて、絹の衣ときれいな手が台なしになりました。日本人のほとんどが馬乗りが下手です。もちろん姉さんは私の乗馬ぶりを見ていつも必ずお笑いになりましたが、私はまだ馬に投げられたことはありません。それなのに私の知っているほとんどの日本人は投げられています。先週は土砂降りでした。しかし金曜日から空が澄み切って、古い山々が生まれ変わったように美しく見えます。私たちを乗せた馬は美しい田舎を通り、神社、記念碑、美しい山々を過ぎて、白人のまだ入ったことのない村に着きました。この大きな町で日本に来てはじめての大群衆(新年の横浜の例があるのみで)を見ました。おそらくその中に唐人を見たことのある者は一人もなかったでしょう。私達が馬で行くと、一人のこらさずひざまずいていました。田島のあちこちで男女が鍬をもつ仕事の手を休めて、外国人をみていました。私は村一番の金持ちの紙商人の歓待を受けました。その家の前には樹齢千年以

上の古い木があります。それはこの家の最初の祖先が初めてこの村に来た時、植えたものです。このようにして先祖代々続いてきたことを思ってください。この家は部屋数が多く、高価で長持ちする木材が使われ、三百年もたった立派な構えの家です。一つの大きな部屋に仏壇と位牌が入っていて、その前に新鮮な花と線香とその日とれた果物が供えてありました。家宝は絵、金銀をちりばめた箱、大君から贈られた刀。著名な人物の署名と筆跡のスクラップ・ブックは二、四百年昔からのものでした。美しい庭、滝、池がその屋敷内にあり、あたりは壮麗、厳肅かつ優美な神の永遠の山並みがありました。私はまだ自分が日本人になりきっていないことは分かります。この静かで礼儀正しく教養ある野蛮人、異教徒のそばでは、米国で人の耳によく入る侮りの言葉でさえむしろ成り上がりにも思われます。このことについて熟考することが私にとって安息でした。有名な越前紙を作る紙漉人を訪ねました。またブッシェルますの蚕のまゆとその糸をほどくところ、絹織

りを見たりして、いろんな新しい興味あることがらを知りました。また米国の大量生産工場と技術について、町の商人や役人を啓発しました。もちろんどこでもそうですが、ここでも私に扇、紙、毛筆、ペン、インクを持ってきて、何か名文句を書いてくれといえますので、シエイクスピア、聖書、ロングフェロウにW E G (グリフィスの頭文字) を寄せて書きました。岩淵と馬を走らせて帰りました。今夜、この手紙を書いています。ルサー氏はこんどの土曜日に福井を離れるつもりです。彼の絹の投機は大失敗でした。というのはその費用を支払うだけのまゆがとれなかつたのです。この蚊は姉さんとの旅先でのおそろしい思い出に全く匹敵します。が今日の蚊は比較の力も及ばぬくらいです。蚊帳のそばに毎夜、頭上に栄光の米国旗をかけて楽しく眠ります。二年前の今日、大西洋に姉さんと出たことを思い出します。またあの海を渡りましょうか。あのヨーロッパ計画は私には大きなことであつたといつも思っています。